
木之本ジュンの華麗なる推理！ 2殺目（河野裕一の事件簿より）

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木之本ジュンの華麗なる推理！ 2 殺目（河野裕一の事件簿より）

【Nコード】

N 6 1 1 6 A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

1 年前に女性が自殺……。そして復讐……。その後は……。

序章

1年前の6月6日PM・9：30。

此処に、とある一軒家がある・・・。

この一軒家にはある女性が住んでいた・・・。

女性の名は、高山たかやま 春海はるか 24歳 独身・・・。

今、女性が自殺をしようとしている・・・。

女性は、台と首を吊る為のロープを用意した・・・。

そして、女性は台に乗り、ロープを首に掛け、台をどかした・・・。

女性は、呼吸が出来なくなり、やがて、死に至った・・・。

温泉旅行

朝起きて、歯磨いて、風呂入って、朝食を摂りながらテレビを見る。
それがジユンの日課。

「ピンポン」と、自宅のチャイムが鳴る。

ジユンは、インターホンを取る。

ジユン：「はい、どちら様ですか？」

裕一：「俺、裕一だけだ。」

ジユンは、受話器を置くと、玄関へ向かった。

ジユン：「何か用？」

裕一：「いきなりで悪いんだけど、温泉旅行に行かないか？」

ジユン：「何で？」

裕一：「実は、旅行券が余ったんだよ。」

4組の真理ちゃんに誘われていたんだけど、親の都合で行けなくな
ったらしいって言うんで、一枚くれたんだ。

だから、その・・・。」

ジユン：「良いよ、行こう？」

裕一：「ああ。」

ジユン：「で、何時なの？」

裕一：「えーと、明日だ。」

と言う事で翌日。

ジユンは旅行へ行く準備をしていた・・・。

まあ、旅行と言っても日帰りの温泉旅行だからそんなに必要は無い
だろう・・・。

そして、準備を終えたジユンは待ち合わせ場所の東京駅に向かった。

ジユン：「ごめーん、待った？」

裕一：「1秒遅刻。」

ジユン：「1秒って、そこまできっちり合わせなきゃいけないんか

い!？」

裕一：「うん。」

ジュン：「す、ストレート過ぎ・・・。」

裕一君さあ、もう少し、優しい人間になったら？

そんなんじゃ、女の子に嫌われるよ？」

裕一：「お前が言うな。」

ジュン：「酷い・・・。」

折角楽しみにしてたのに・・・。

あたし、帰ろうかな？」

裕一：「じよ、冗談だつて！」

と、兎に角、早く行かないと間に合わなくなるぞ？」

と言う訳で、二人は電車に乗り、温泉旅館へ向かった・・・。

乗ってから2時間くらい経過しただろうか、電車は目的の駅に到着した。

二人は、駅から旅館までの間を走っている無料送迎バスに乗った。

そして、数分が経った頃、バスは旅館に辿り着いた・・・。

だが・・・。。。。。

ジュン：「これって本当に旅館なの？」

裕一：「旅行券によるとそうなってるが・・・。

それにしても、やけにボロイな・・・。」

ジュン：「ま、折角来たんだし、入ってみようよ!」

裕一：「そうだな・・・。」

二人は、そのボロ旅館に入って行った・・・。

温泉旅館殺人事件！

二人は部屋にいた・・・。

ジュン：「裕一君、あたし、お風呂入って来るね。」

裕一：「じゃあ、俺も風呂に入って来るよ・・・。」

ジュン：「それじゃ、途中まで行きましょ？」

裕一：「ああ。」

二人は、別館にあるお風呂に向かった・・・。

ジュン：「ねえ、混浴があるわよ？」

裕一：「だから？」

俺はお前と入る気はサラサラ無いよ。」

ジュン：「ちつ。」

と、舌うちの様な物が聞こえた。

裕一：「お前、俺と入りたいのか？」

ジュン：「そんな事、ある訳、無いじゃない！」

と、言い残し、女風呂の方へ、入って行った。

ジュンは、服を脱ぎ、タオルを持って浴場に入り、体を洗って浴槽に入った・・・。

ジュン：「はあ、極楽極楽。」

と、おばさんの様な事を言った・・・。

だが、そんなひとときも束の間・・・。

男湯の方で「うわー！」と悲鳴が聞こえた・・・。

男湯には、野次馬が集まって来た・・・。

皆、我を忘れ、服装など気にしていない。

中には、裸の女性客もいた・・・。

そして、ジュンが何があつたのかと、バスタオルを身にまとい、駆けつけてくる・・・。

ジュン：「何があつたんですか？」

女性：「事件があつたんですって。」

男性：「温泉で自殺とは・・・。」

そして、ジュンが奥に歩み寄ると、裕一が遺体を調べていた・・・。

裕一：「皆さん・・・これは自殺じゃない。」

巧妙に見せかけられた殺人だ！」

と、裕一が真剣な眼差しで言った。

程なくして、裕一の通報により警察が現場検証に入ってきた。

桐山刑事：「神奈川県警の桐山です。」

と、一人の刑事が警察手帳を見せながら言った。

そして。

桐山刑事：「第一発見者はどなたですか？」

すると、一人の若者が声を掛けた・・・。

裕一：「僕ですよ。」

なんと、裕一が第一発見者！？

裕一は、刑事に事件当時の事とを話した・・・。

桐山刑事：「それじゃ、君が最初に見つけたんだな？」

裕一：「ええ。」

桐山刑事：「それで、遺体には触っていないだろうな？」

すると、裕一は遺体の状況を説明した。

裕一：「被害者の死亡推定時刻は本日PM・3：00。

死因は、手首を剃刀で切った事による出血死。^{かみそり}

それ以外に目立った外傷はありません。」

桐山刑事：「成程、そこまで知っているとすると、君が怪しく見

えて来たな。

取りあえず、詳しい事を聞くから署まで来い！」

と、桐山は裕一を連れて行ってしまった・・・。

ジュン：「ゆ、裕一君!？」

裕一は、瞬く間に刑事とともに姿を消した。

その時、ジュンは自分の肌とタオルの間に何かが挟まっている事に気づいた。

ジュン：「（何かしら?）」

それは、裕一の残した被害者の死因やらなにやらが詳しく書かれた物だった・・・。

連れて行かれる際に裕一が残したのか？

恐らく、ジュンに事件を解決して貰おうとしているのだろう・・・。
ジュンはそれを読んだ。

- - - - -

遺体の状況

死亡推定時刻はPM・3：00。

左手首損傷。

死因は静脈切断による出血死。

凶器は剃刀。

遺体は、左手首に傷が付いているのに、左手で剃刀を持っている事から、俺は殺人と判断した。

真犯人が見つかるまで俺は出られないかもしれない。
後は任せた・・・。

- - - - -

ジュン：「（後は任せたってどうすれば・・・。
ん、まだ続きがあるわ。）」

- - - - -

解らなくなったら今までの事を整理しろ！

- - - - -

これでは余計意味が解らない・・・。

こんなので本当に解決出来るのか？

その後、警察の調べで、被害者の名は「高宮 明」だと解った・・・。

そして、その被害者の友人達が当旅館にいると言う事も解った。

事情聴取

ジューンは、名前は出せないが、とある博士に作って貰った盗聴機を使つて、取調べの様子を盗聴していた・・・。

取調べを受けるのは4人である。

桐山刑事：「では、まず君の名前から。」

と、刑事は被害者の友人である男性に名前を尋ねた。

害者の友人は、「小島 恒彦^{つねひこ}」と名乗った。

小島は、被害者とは大学の友人で連れの者と一緒に旅行へ来ていたと言う。

桐山刑事：「小島さん、最近、被害者に変わった所はありましたか？」

恒彦：「変わった所ですか？」

特に無かったですね。

いや、待てよ・・・。

そつえば昨日、愛美^{まなみ}と酷く争っていたな・・・。」

え、酷く争っていた？

桐山刑事：「それは何時ごろですか？」

恒彦：「夜中だよ、夜中。」

多分、2時頃だったかな・・・。

俺、トイレに目が覚めて、戻つて来たら隣の部屋で二人が争っていたんだ。」

桐山刑事：「そうですか。」

因みに、PM：3：00頃、貴方はどこにいましたか？」

恒彦：「お、俺を疑つてるのか刑事さん？」

俺は3：00頃は部屋にいた。

そこで、悲鳴が聞こえたんで、浴室に行ったんだ。

それだけの事だ。」

桐山刑事：「ありがとうございます。」

そう言つて、桐山刑事は次の人を呼んだ。

桐山刑事：「では、貴方のお名前を教えて下さい。」

そう言つと、その人は答えた。

愛美：「黒田 愛美。」

桐山刑事：「貴方、夜中の2時頃、被害者の高宮さんと酷く争つていたそうですね。」

愛美：「てめえ、俺を疑つてんのか!？」

どうなんだ、ああん!？」

極度の俺っ娘だ・・・。

桐山刑事：「そんな事はありません。」

それより、君は女性なんだから女性らしくしたらどうなんだい？」

愛美：「うるせえよ!

俺がどんな性格だろうとてめえには関係ねえだろ!」

桐山刑事：「そうですね・・・。

(やれやれ・・・。)

因みに、今日のPM・3：00頃はどこで何をしていましたか？」

愛美：「PM・3：00頃？」

そんな事一々覚えてねえよ。」

桐山刑事：「そうですね・・・。」

それ言つと、桐山刑事は黒田を解放し、次の人物を呼び出した。

次の人物は、「影山 紀夫^{のりお}」と名乗つた。

桐山刑事：「影山さん、貴方はPM・3：00頃、どこにいましたか？」

紀夫：「僕は、黒田さんと一緒に部屋にいました。

実は、僕と黒田さんは付き合っているんです。」

聞いて無いって!

桐山刑事：「そうですね・・・。

では、最近、被害者になつた事がありますか？」

紀夫：「いや、無いですね。」

桐山刑事：「そうですね。」

そう言っていると、桐山刑事は影山を解放し、4人目の人物を呼び出した。4人目は、「武山 薫^{かある}」と名乗った……。

名前からして女っぽいが一応男だ。

桐山刑事：「貴方はPM・3：00頃、何処にいましたか？」

薫：「3：00頃？」

覚えてないなあ……。」

桐山刑事：「最近、被害者に変わった所はありますか？」

薫：「そう言うのは、解らないです……。」

僕、彼とは余り親しくないのです……。」

今のところ、影山さんと黒田さん以外にアリバイは無い様だ……。

それはそうと、裕一はどうなったのだろうか？

ちよつと、県警の様子を覗いてみよう……。

刑事A：「なあ、正直に吐いちまえよ？」

お前がやったんだろ？」

裕一：「僕はやってませんよ。」

1,000歩譲って僕がやったとしましょう。」

1,000歩？

100歩の間違いじゃ……。

裕一：「動機は一体何なんですか？」

刑事A：「動機は、まあ、あれだ。」

被害者と偶々ぶつかって口論となり、勢いで殺害してしまった……。

そんな所だな。」

裕一：「じゃあ何で凶器がカミソリなんですか！？」

勢いで殺害すんなら凶器なんか使いませんよ！」

刑事A：「た、確かに……。」

そこへ、「コンコン」と、誰かが扉を叩く。

刑事は入れと言った。

すると、刑事が入って来た……。

刑事B：「おい、何やってる！？」

そのお方を誰だと思ってるんだ!？」

刑事A：「誰って、遺体の事に詳しくあったんだから犯人に決まってるだろう。」

刑事B：「そのお方は本庁の捜査一課の河野警部殿の息子さんで現役の名探偵さんだ！」

その様なお方が殺人を犯す訳が無いだろ!？」

刑事A：「何、本庁の!？」

刑事は焦ったが、直ぐに冷静になり裕一に謝った。

刑事A：「も、申し訳御座いませんでした！」

貴方があの有名な名探偵殿とは存じ上げずに犯人と疑ってしまいとんでもないご無礼を……。」

裕一：「か、顔を上げて下さい。」

そんなに謝られても困ります!」

刑事A：「いや、これぐらいはしないと私の気が済みません!」

裕一：「いやいやいや、もうそれだけで充分ですので顔を上げて下さい。」

刑事は、^{よこや}漸く顔を上げた。

そして、「何かする事がありますか」と、聞いて来た。

裕一は、「事件現場へ行かせて下さい」と答えた。

さて、舞台は旅館へ戻り、ジュンは取り調べで得た情報をまとめていた……。

ジュン：「(えっと、影山さんと黒田さんを除外すると、残ったのはアリバイの無い小島さんと武山さん……。」

しかし、武山さんは被害者とは親しくないと言っていた……。

そして、小島さんは……。

あつ、解ったわ!

犯人はあの人!」

ジュンは、桐山刑事と4人の容疑者に話があると、ロビーに集めた。

事件の真相（前書き）

此処から犯人の名前が出ます。

事件の真相

ジューンはロビーにいた・・・。

愛美：「おいおい、お前なあ。

俺らをこんな所に呼び出して何をしようって言うんだ?」

薫：「そうですよ。

一体、何が目的なんですか?」

桐山刑事：「お嬢ちゃん、我々警察は今忙しいんだ・・・。

お遊びに付き合ってる暇は無いんだよ?」

ジューンは、そう言う皆に「直ぐ終わる」と言った。

恒彦：「本当に終わるんだろうなあ・・・。

で、話って何だい?

早く話してくれよ・・・。」

ジューンは、「犯人が解った」と告げた。

紀夫：「それ、本当なんですか?」

ジューン：「私は嘘で人を集めたりんかしません。

良いですか、犯人はこの中にいます!

そして、犯人は小島 恒彦さん、貴方です!

貴方は事件当時、被害者を浴場で殺害した後、部屋には戻らずその

場に残った。」

恒彦：「待ってくれ。

何で僕が彼を殺さなくてはいけないんだね?

第一、犯行のあった時間は部屋にいたんですよ?

殺せる訳無いじゃないですか。」

桐山刑事：「そうだよお嬢ちゃん。

さつき、小島さんのいた部屋からお風呂場までの時間を計ったが、

軽く10分は掛かったぞ?」

ジューン：「刑事さん、犯行のあった時間、彼は部屋にはいませんでした。」

それを証明するのは、『悲鳴』です!」

恒彦：「そ、その悲鳴が何の証拠に？」

ジユン：「さつき、小島さんと浴場までの時間は10分だと言いましたね。」

そう考えると可笑しいんですよ。

移動するのに10分掛かる所で浴場の悲鳴が聞こえますか？

いいえ、聞こえません。

それに、浴場は別館にあるんですよ？

どう考えても聞こえる筈がありません!

つまり、貴方は犯行時刻に現場にいた……。

そうですね、小島さん!」

小島は、その場に膝を付いた……。

恒彦：「あいつが悪いんだ。」

1年前、俺はある女性と婚約していたんだ……。

だが、高宮の奴がその子に言い寄って、彼女はそれが嫌で自殺してしまっただんだ……。

首を吊ってな……。

だから、俺は高宮を自殺と見せかけて殺したんだ。

だが、とんでもない所でミスっちまったなあ……。

右手に持てれば良かったのに左手に持たせて……。

それに、悲鳴の事もなあ……。」

小島は、全てを話し終わると、刑事に手を差し出した……。

刑事は、小島に手錠を掛けた……。

そして、小島は逮捕され県警に連行されて行った……。

こうして、事件は解決して幕を閉じた……。

ジユン、名推理だったぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6116a/>

木之本ジュンの華麗なる推理！ 2殺目（河野裕一の事件簿より）

2010年10月10日19時22分発行